

第 1 回世田谷区総合教育会議

日：令和元年 7 月 25 日（木）

場所：世田谷区民会館ホール

午後3時20分開会

○司会 それでは、第2部の世田谷区総合教育会議を開催いたします。保坂区長、よろしくお願いたします。

(スクリーン使用)

○保坂区長 それでは、第2部の、今度は総合教育会議のほうに移っていきたいと思います。天笠先生のお話の中で、これからの教育に大変求められている、実に多様な角度からお話をいただきました。

冒頭の御挨拶で申し上げたとおり、きょうは、渡部理枝新教育長、この総合教育会議では初めて登場ということでございますので、まず、これまで尾山台小学校で実践されてきたその取り組みをお話していただきたいと思うんですが、きょうはメンバーとして、渡部教育長、そして濫澤教育委員、松平教育委員、宮田教育委員、そして亀田教育委員というメンバーでいきたいと思います。

これまでこの2年間、例えば平成29年度は、幼児期からの豊かな「遊びと学び」の環境づくり、そして「学びの質的転換」と「新教育センターの役割」、これが1回目でした。2回目は「配慮を要する子どもたち」と「学びの多様性」、そして「子どもの可能性を伸ばす学校外の教育環境」。そして昨年、こちらのほうでは、1回目は「学びの質の転換と新学習指導要領」ということで、文部科学省審議官にお話いただき議論しました。そして2回目ですが、「SDGs（持続可能な開発目標）」、これを実際に都立の高校で教壇に立っている山藤先生にお話しいただいてディスカッションをした。そんな流れの中で、今年もさらに進化させていきたいと思います。

それでは、渡部教育長、お願いします。

○渡部教育長 皆さん、こんにちは。これから少しお時間をいただいて、子どもの自己肯定感を高めるキャリア教育についてお話をさせていただきたいと思います。

私は、5月の中旬まで世田谷区立尾山台小学校の校長として勤務をしておりました。そこでキャリア教育に取り組んできた実践についてお話をさせていただきたいと思います。

さまざまな教育活動の中で大切だったことは、子どもたちが自分にはいいところがあると自分自身で感じることでした。自己肯定感が高い子どもたちは自信を持って進んでいくことができます。しかし、尾山台小学校の子どもたちは初めから自己肯定感が高かったわけではありませんでした。

これは平成26年度全国学力・学習状況調査の児童質問紙より、子どもたちの結果です。

このような質問紙があつて、6年生の子どもが答えています。まずは+評価です。毎日朝食を食べている、読書をしている、家の人に学校での出来事を話している。落ちついた住宅街にあり、子どもたちも落ちついて生活を送っています。

こちらが課題についてです。気になるのが、自分にはよいところがある、将来の夢や目標を持っている、このポイントがとても低く出ていたことです。これはそれをグラフであらわしたものです。ちょっとわかりにくいんですが、ここが尾山台小学校の結果です。これが東京都です。これが全国です。これが2つ当てはまる、どちらかといえば当てはまるを加えてもこんなに低く出ています。将来に夢や目標を持っていますかに関しても、当てはまるというのが、全国、それから東京都に比べてもとても低く出ていました。

これは尾山台小学校の子どもたちだけの結果なのでしょうか。これはPISAの結果です。PISAとはOECD加盟国の子どもたちの学力調査のことです。15歳の高校1年生の調査結果です。科学的リテラシーと数学的リテラシーは1位、読解力も6位と、決して悪い成績ではありません。このPISAの結果をグラフにあらわしたものです。一旦、2003年と2006年で下がっているところがありますが、あとは上昇し、それからもずっと大体横ばい状態で、これも悪くはない状態です。

これはTIMSSという調査結果です。これは小学校4年生と中学校2年生の数学と理科の調査の結果です。全国、40カ国が参加をしています。これは赤で示しているのが上昇しているところですが、数学と理科の結果はまだまだ上昇傾向にあるということがわかります。

これは少し前の調査ですが、それほど変わっていないので、この調査をもとにお話をさせていただきます。これは平均点が上位の国です。その一番上にあるところが日本です。これが平均点です。数学と理科はとてもよい成績になっています。ところが、今矢印であらわしているのは勉強が楽しいと答えた割合です。次の矢印のところは勉強すると日常生活に役立つと答えた割合です。最後が将来自分が望む仕事につくために、よい成績をとる必要があると答えた割合です。

このことから、日本の子どもたちは学びに対する興味関心の希薄さから、勉強はできるけれども好きではない。今後との関連が見えないので、勉強は将来の役に立つとは思っていない。勉強は卒業までの我慢だと捉えていることがわかります。このような状況から、子どもたちになぜ学ぶのかを理解させるために、日常と結びつけた教育への転換、それから自分に自信を持たせること、これが急務であると言えます。

これは学習指導要領の中の育成すべき資質・能力の3つの柱です。生きて働く知識・技能の習得、未知の状況に対応できる思考力・判断力・表現力の育成、学びを人生や社会に生かそうとする力、人間性の涵養が挙げられており、ここの部分はキャリア教育と一致しています。

また、自分の将来と結びつけた学習や、子どもたちが主体的に学ぶ態度を身につけさせるキャリア形成が重要視されています。先ほど、天笠先生の話の中で学びに向かう力というのがありました。ここではキャリア教育の視点でこれを捉えました。キャリア教育を通してこの学びに向かう力を子どもたちにつけようと考えました。

このようなことを考え合わせて、尾山台小学校ではキャリア教育に取り組むことにしました。キャリア教育とはキャリア発達を促す教育です。そしてキャリア教育とは、社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程のことをいいます。つまり、なりたい自分になる教育というふうに考えました。

キャリア教育の役割は、子どもたちの学びをつなぐということです。今の学びを将来、数カ月後、数年後にどのようなようになるのか、役に立つかを子どもたちに伝えます。また、過去の学びが今に生きていることも実感させます。これが縦のつながりです。子ども同士、子どもたちと地域、保護者をつなぐ横のつながり、これも大切な要素です。縦と横のつながりを意識させ、未来に向かって学びが生きているということを子どもたちに実感させます。先ほど、天笠先生の話の中にもありましたソサエティ5.0の話の中で、過去と未来を結びつけることという話や、さまざまな人々をつなぐこと、それから生涯にわたって学び続けるマインドの形成を図ることということがあり、これはまさにこれと全く一致しているので、私はキャリア教育からこれを実践しようと考えましたが、ソサエティ5.0の考え方もこの考え方と一致していることがわかります。つながりを意識させることで、子どもたちが学ぶ意義や学ぶおもしろさを感じ、生涯にわたって学び続け、社会で力を発揮しようとする意欲を持たせる、これがキャリア教育の役割です。

これはちょっと細かくて見えないと思うんですが、これはキャリア教育を図示したものです。細かくどんなことをやっていったということがあるんですが、きょうはこの授業の中のキャリア教育という視点と手だてという中で、異学年交流と地域との連携についてお話をさせていただきます。

授業の中のキャリア教育、2点目が縦のつながりで異学年交流、3点目が横のつながりということでリアル職業調べ、おやまちプロジェクトということについてお話をさせてい

ただきたいと思います。

まずは授業の中のキャリア教育です。キャリア教育というと、中学校以上で行う職業教育と思われることが多いので、授業の中で行うというと驚かれることが多いです。キャリア教育ではキャリア目標を全ての、右側にあるところですが、これが4つの基礎的・汎用的能力です。この中から尾山台小学校の子どもたちの実態に合わせて4つを決めました。自分のよさに気づく力、先ほど、自分のよさがわからないという子どもが多かったので、自分のよさに気づく力、それから思いを受けとめる力、思いを伝える力、チャレンジする力、この4つをキャリア目標にしました。

そして、教室の黒板の上にこの4つの目標がどの教室にも張ってあります。キャリア教育の役割であるつながるということを授業の中でも意識して子どもたちに伝えます。この学習のここは高学年になっても使うねなどというように話をします。ここではこれはよさに気づくだねというふうに先生が伝えています。こういうことをずっと伝え続けていると、子どもたちが、この勉強は2年生のときに習ったよ、これにつながっているねなどという言葉が、子どもたちからも聞かれるようになります。

今ここにあるキャラクターは、尾山台小学校のキャリア教育でつくったキャラクターで、キャリアンというものです。

これが年間指導計画です。学習の流れが一目でわかるようになっています。赤で囲ってあるのがメインの学習です。このメインの学習につながるためにどこでどういう力をつけるのかというところが矢印で図示されています。教科を、また教科を超えた関係がわかるようになっています。これからは教科の見方ではない考え方が必要になってくるので、この表を見ると、ここがこういうふうに関連しているというのがわかるようになっています。これは常に掲示をしてあるので、子どもも保護者もよく見ていて、ああ、今はここだねなどということを、子どもたちがよく話をしています。

次に、授業の中で自分のよさに気づく力の育成です。授業ではペアやグループでかかわり合いながら目標を達成させる場面をつくりました。友達と意見を出し合うことで新たな気づきや学びがあり、一緒に目標を達成した喜びを共有できます。互いによさを伝え合うことで達成感や自己有用感を得ることができました。

これはキャリア・パスポートです。6年間の成長を記録して、過去の自分と向き合うとともに、将来の自分を思い描けるようにするという狙いがあります。一冊20ポケットのファイルを使用して、6年間の記録をポートフォリオ式でとじるようにしました。これはキ

キャリア・パスポートの一番前に書いてある言葉です。ちょっと読んでみます。このファイルは皆さんの成長の記録です。また、なりたい自分を思い描き、その自分に近づくためのパスポートです。こうなりたい、こんな人を目指したいというイメージを持つとパワーが湧いてきます。ことし1年間でどんな自分になりたいのかを考えてみましょう。その姿に向かって生活することは、皆さんの毎日を豊かで充実したものにします。これがそのキャリア・パスポートを書いていく前に書いてあるところです。子どもたちはこれを読んで、ああ、これがこういう狙いなんだなということを理解するようになっていきます。

それから、ここで大事なのが、一番左側に書いているのが、これは6年生と書いてありますが、6年生の目指す自分を書いて、1学期ではこれをやろう、2学期ではこれをやろう、3学期ではこれをやろうというふうに考えていくことです。そしてその振り返りを自分で書いています。学年の一番終りには保護者にもそれを書いてもらうようにしました。子どもによっては、なかなかポジティブなことを書けないという子もいるんですが、そこは注意をしてネガティブなことで終りにしないというふうなことは、先生方と話し合いをして決めておきました。

世田谷区では中学校とも連携した教育を行っています。これから幼稚園、保育園も入れて少し幅を広げようというふうに考えていますが、今、小中連携として行っていることです。中学校へのスムーズな移行のために、先生方が話し合ったりもしています。キャリア・パスポートの引き継ぎということで、尾山台小学校では、公立の学校に行く子についてはそのまま持っていくんですが、私立に行く子どもに関しては、子どもに今は持たせているような状態です。ここはこれから課題になってくるなというふうに考えています。文科省のほうでも、このキャリア・パスポートというのをうたっているんで、どう引き継いでいくかということが、これからの課題になってきます。

次に、縦のつながりである異学年交流についてお話をさせていただきます。

これは「にじいろタイム」という活動です。水曜日の中休みにこうやってパートナーさんと遊ぶ時間を決めました。1年生と6年生、2年生と5年生、3年生と4年生というふうに組み合わせを考えました。これは前は2年－4年、3年－5年だったんですが、いろんな学校の事情から毎年見直しをしています。今はこれに落ちついていきます。

6年生は1年生の目線において優しく接し、1年生は6年生に憧れの気持ちを持ちました。自分のいいところはないと答えていた6年生の中に、自分のよいところは小さい子に優しくできるところだということに気づいた人もいました。6年生は委員会活動や授業の

片づけなどを自分たちで行っているため、休み時間も忙しいことがあります。この子は、小さい子が待っていてくれるので、早く行かなきゃと思いますと話していました。

これは展覧会をパートナーで見て回っている様子です。低学年から人数がふえてしまっているのに、パートナーといっても1対2の関係になっています。低学年の子どもは何でも素直に喜ぶので、6年生にとっては、それがとてもうれしいようでした。

次に、横のつながりについてです。尾山台小学校では、キャリア教育の集大成として、6年生でリアル職業調べを行っています。10名の職業人の方に来ていただいて、自分の仕事だけではなく、自分の生き方について語っていただくようお願いをしています。保護者や地域の方の中からさまざまなつながりで来ていただいています。ゲストの方たちからも、自分の仕事を見直すいい機会になったなどとお話をいただいて、来年もぜひ呼んでくださいなどという声もいただいています。ポイントは、子どもたちが少人数でお話を伺うことです。このときは少し人数が多いのですが、今は大体6人から7人ぐらいでお話を伺うようにしています。2時間で3人の方からしかお話を伺うことはできないんですが、子どもたちは、誰に聞いても同じような話をしていたという感想を持っていました。子どもたちは講師の方のお話を聞いて、自分も新しいことにチャレンジする勇気を持ちたい、仕事は人を幸せにするためにある、失敗してもそれをばねにする、相手を思い、自分の世界を広げると、多くのことを学び、自分の将来の生き方について具体的なイメージを持つことができました。

子どもたちの意識にも大きな変化がありました。最初は働くというところではイメージが余りよくなかったんですが、ゲストの方から話を聞いて、仕事は大変というところから、やりがいがあるというところに変化をしました。

次は横のつながり、おやまちプロジェクトのことについてです。これからちょっとおやまちプロジェクトのことをお話しさせていただきます。

おやまちというのは、尾山台小学校の周辺の地域の総称です。地域の中にはさまざまな組織や機関などがあります。とてもよい地域でしたが、ばらばらに機能しているような状態でした。そこで、1つの大きなまとまりにしたいと考えたことが始まりでした。地域の商店街、大学、保護者、小学校が中心となり、プロジェクトを立ち上げることにしました。この真ん中にいる4人が発起人になりました。一番左側が地域の方、そしてその次が大学の先生です。そして私がついて、一番右側の方が保護者の方で、大学の教授です。そして何か立ち上げるということで、おやまちプロジェクトという名前にして立ち上げました。

ビジョンは、おやまちを垣根を越えたつながりと学びのあふれる地域にということです。まずは地域の代表の方たちに集まっていただいて何ができるかということ話し合いました。このときに、地域の方が持ってきてくださった1枚の写真で話がとても盛り上がりました。この地域は昔はこんなことがあったねとか、こんなふうに変化したねなどという話をしたので、では、50年の時を越えた撮影会をやろうということに決まりました。これは右側が尾山台商店街の昔です。左側が新しい尾山台商店街です。そして、そのときに持ってきてくれた写真をもとに撮影会を行いました。その場所に行って写真を撮っています。

これがそのときに撮ってきた写真を加工したものです。左が昔の尾山台小学校の正門で、右側が今の尾山台小学校です。それから、これが尾山台駅のそばのアーケードのところです。歩く人たちの服装も今とかなり違っているということがわかります。

それから、これが歩行者天国を活用した活動です。尾山台商店街は、毎日16時から18時までが歩行者天国になっています。でも、そこで余り活動していなかったのもので、そこで何かできないかということで始めたものです。ここでは剣玉を地域の方とともに行っていきます。ここではテントを張って休んでいる親子がいます。下の写真は、尾山台小学校のサマワークショップと連携した活動です。テントの中でうちわのようなものをつくっています。ここでは東京都市大の大学生がとても活躍をしてくれました。これから、ここでは写真を載せていないんですが、もっとたくさん発展をしまして、机を出して宿題をやっている子どもがいたり、それから、SDGsについて学ぼうということで、子どもたちがカメラを持って町に出て、地域の人から話を聞いて、気をつけていること、環境について配慮していることなどを写真に撮るなどということもやりました。それから、大人向けにSDGsのサロンをしたり、最近では子ども食堂も始まりました。尾山台小学校の地域は、子ども食堂ということとともに孤食を防ごうということで、ふれあい食堂というような形を今はとっています。

これは一番最初にお見せしたグラフがどのように変化したかというところです。先ほどは白黒だったものです。この全国学力・学習状況調査の児童質問紙です。一番上が平成26年度、一番下が平成30年度です。これは自分にはよいところがあると思いますかという6年生のところですか。段階的によくなってきています。当てはまるが青で、どちらかという当てはまるを合わせると段階的によくなってきています。それから、これが人の役に立つ人間になりたいと思いますかというところです。ここはでこぼこしているんですが、総体的にはふえていることがわかります。

これからは、私は尾山台小学校から離れて世田谷区教育委員会になりましたので、キャリア教育にも来年度から本格的に取り組んでいきたいというふうに考えています。これからも子どもたちの自己肯定感を高めることを基本にしていきたいと考えています。

御清聴、ありがとうございました。(拍手)

○保坂区長 ありがとうございました。多少時間内におさめるために具体的な授業の仕方とかについては省かれたところがあると思うので、私から一、二点質問させていただきたいと思いますが、最初に、調査結果の中で、学びに対する興味関心が希薄で、勉強はできるんだけど嫌いであること、あるいは将来との関連性が見えていないという課題があった。また、勉強は卒業までの我慢だみたいな、そういう意識があったわけですね。キャリア教育は狭い概念の職業教育ではなくて、自分のよさに気づいたり、人を大切にしたり、思いを伝えたり、チャレンジするということだったのですけれども、それを授業の中で重ねていき、あるいは異学年交流とかそういうことで、子どもたちはどういうふうに変わっていったんでしょうか。

○渡部教育長 勉強に対する興味ということを中心にでよろしいでしょうか。実は、ここにはグラフ的にはあらわしてはいないんですが、子どもたちは体力がとても伸びたんです。不思議なことなんですが、自分に自信を持つといろんなことができると思うことだけでも体力がすごく伸びました。それから学力も、ここにはっきりとは出してはいないんですが、全体的には伸びてはきています。はっきりとそういうキャリアをやったからということではなく見ているので、一概にこれをやったからということではないんですが、子どもたちは意欲を持っているので、まずは授業の態度が変わってきているので、そういう意味では底上げはできているかなというふうに思います。

○保坂区長 もう1つ伺いますが、つなぐというキーワードが出ました。今と未来をつなぐということで、つまり、なりたい自分、こうありたい自分というのを描いて、そこに向けての一步、二歩が学びである、そういう実感が子どもたちの中で獲得されたというか、そういう実感がだんだん芽生えてきたことによって意欲が生まれてきたのでしょうか。

○渡部教育長 実は仕掛けはいっぱいしてありまして、先ほどリアル職業調べをやったときに、余りにも将来のことだと先でイメージが湧かないと思うので、先ほどのリアル職業調べの方には中学校のときに何をやったかということをお話ししてもらっているんです。だから、中学のときにはこれを頑張っていたよとか、そういう話もしてもらっているので、割とすぐ近く、6年生は今だから、中学ではこんなふうにやればいいんだとか、嫌でも部

活はすぐにやめないで、ちょっとは頑張れば道は開けてくるとか、そんな話もしてくれているので、ちょっと近い将来のことも思い描けるように工夫はいろんなところでしています。

○保坂区長 もう1つは、この横につながるのところでおやまちプロジェクトの話をいただきました。これまでも世田谷区の各学校で、学校の中に地域のいろいろな力が入り、地域のプレーヤーというか、それぞれ個性あるいろいろなグループであるとか、地元の団体だとか、さまざまな形で学校を支えるという形はあったと思います。また、学校が町に出ていくということも総合的学習などであったとは思いますが、どうも今のおやまちプロジェクトは一步そこをまた超えて、地域の人と子どもたちや学校、あるいは大学生などがまじって、商店街で一緒に何かをつくったり、試行錯誤したり、そういうところまでやってみようと思いついた理由というのはどういうところだったのでしょうか。

○渡部教育長 地域との連携をやっている学校は本当にたくさんあるんです。もう世田谷区はコミュニティースクールですし、ここにも学校関係の方がいっぱいいらっしゃるんですが、どこも多分やっというふうな感じがするんです。ただ、それが一方通行だったり、地域の方はとてもいい方たちなので、やってくださいと言うと何でもやっというふうな感じがするんです。それから、例えば地域のお祭りとか、子どもがたくさん欲しいんですというふうに言われると、子どもはいっぱい出ていくんです。ただ、それが言われたらやるという形で、お互いにうまく融合されていないというふうな感じがしたんです。だから、町全体が学びになったほうがいいんじゃないかというところでまず話をしました。だから、理想形は、歩行者天国で子どもが宿題をしているとか、そういう形の学びにならないかということと、あと、私はもう教育課程の中だけで学習をする時代ではないというふうな感じがしたので、SDGsの学習についても、町に出て、世界の入り口は私たちのすぐ身近にあるということ、子どもに実感させることが大事だと思ったんです。だから、それについて、誰もが遠い世界で起こっていることではなくて、もうこんな商店街でもやっているんだ、それから、私たちがみんなやっているんだということを実感させることが必要だと思ったので、とにかく町の中で学ばせようと思いました。それを地域の方たちが非常に受けてくださいました。でも、なかなかそれが広がっていくというのは難しいなと感じてはいます。

○保坂区長 地球儀や地図を見ながらSDGsを語るんじゃなくて、商店街の歩行者天国の中でそこを感ぜると、大変すばらしい取り組みだったと思います。

それでは、これから今のお話をどのように教育委員の皆さんが受けとめたか、伺ってい

きたいと思います。

まず、澁澤委員からお願いいたします。

○澁澤委員 澁澤です。よろしくお願いします。

実は私、今、渡部先生の話聞いていて、私も実はなりわいというか仕事でキャリア教育をやっているんだなということを改めて実感したんです。私は小学校や中学校でキャリア教育をやっているわけではなくて、私のやっている場所は中山間地とか、あるいは過疎地と言われているところで「なりわい塾」をやっています。1つは、豊田市の中山間地域、トヨタ自動車の急激な雇用創出で最も過疎が進んだエリアです。それから岡山県の、これも中山間地域ですけれども、林業だけでは暮らしが成り立たなくなった真庭市。それから、福井県の若狭町という三方五湖のある、これは湖を中心とした生活、文化があるところで、そこも過疎が大変進んでいるところです。それから、もう1つは岐阜の白鳥町にある石徹白という、これは白山信仰、信仰の町なんですけど、信仰がなくなると同時に人がいなくなってきた町。

そこで、実は私のやっている生徒は20歳代、30歳代、40歳代の若い夫婦であったり、あるいは子ども連れの人たちです。その人たちが地域で暮らしたい、自然の中で子どもを育てたいとか、それから自分が必要とされる社会で生きたいと思って、1回社会に出て、だけれども、働き方がこれじゃないなと思って、そして地域に入ってくる。特に3・11以降は大変多くの若者が入ってきています。地方というと何か過疎が全部進んでいるように思われるのですが、過疎の進んでいるところと若者がふえているところではもう本当に変わってきています。どうやって若者を地域に入れていくか、若い人たちがそこで暮らしていけるようにできるかということの勉強をしていこう、みんなで学んでいこうということで、なりわい塾、教えていることはなりわいなんです。

なりわいと職業はどう違うのか。みんな都会から来た人たちは職業を選ぼうとするのです。例えば大工という職業、あるいはマタギという職業。ただ、そこで生きている人たちは、大工という生き方をしている、マタギという生き方です。どう違うかということ、マタギという生き方をしている人たちは、自分たちの食べ物は自分たちで作り、自分たちの家の屋根は自分で刈ってきたカヤでふき、自分たちの着るものは機を織って自分たちで作り、どうしても現金で買わなきゃならないものを買うために、熊を撃って、その胆嚢を業者に売って、そして現金収入を得て生活を成り立たせる。基本的には年がら年中鉄砲を持って山をうろついている人ではないのです。

農家もそうです。みんな農業と農の区別がつかないのです。農業をすゝると思つて来るんですが、話をするとそうではなくて、農をしたい。つまり、農というのは自分の食べている食べ物を自分でつくり、まさにお百姓です。自分が生きるということを自分の手でやっゝていゝながら、地域社会で必要とされた暮らしをしたい。農業というのは産業ですから、それをお金にかゝえるということです。職業イコールお金を得るということで、お金を得れば幸せになれるという、ある意味ではこの50年間の物すゝごく短絡的な価値観で職業選ゝびをしてきた。都会はそれで済んだかもしれない。ところが、田舎に来るとそうではなくて、自分の生き方、大工という生き方をしていゝきます。大工としての生き方というのは、幾ら稼げるかではなく、自分の習う棟梁と同じ手を持つことです。同じ目を持つこと、同じ耳を持つことなんです。同じ感覚を持たないと同じ家をつくることができないからです。そういうような本当のなりわいというものが日本の社会にはたくさんあつて、逆にそれが地域を成りたたせてきました。

マタギにしても大工にしても、技術は全部親から教わるのではないんです。全部自分のお兄ちゃんに当たる人たち、あるいはその上のおじいちゃんに当たる人たちから習います。親はライバルです。ですから、マツタケのありかも教えてくれません。だけれども、おじいちゃんは孫にはマツタケのありかをちゃんと教えてくれます。あるいは大工の手本も、自分の親はライバルですから教えてくれないけれども、横にいるお兄ちゃんは手とり足とり、いろいろなことを教えてくれるし、人生の相談にも乗ってくれる。その教育システムはかつて若者宿といつて日本全国にありました。今でも1つだけあるのが三重県の答志島という島に残っています。

そういうような中で、ある意味では社会教育のシステムです。要するに親子で教育ができない、家庭教育ができないものを、どうやっゝて地域社会で子どもたちを育てていくか。その中に多分学校教育があつたんだと思います。全部学校教育でやることは無理で、まさに渡部先生がおっしゃつたとおり、地域と学校が一緒になつて、次世代を担う人たちをその中でつないで、そして育てていくことが重要です。

そういうような学びの場がなりわい塾です。20代、30代で、何となくお金を得るためだけに一生懸命働くということにむなしさを感じたりとか、自然の中で子どもを育てたいとか、小規模校で子どもを育てたいとか、そういうような考えを持つ若い人たちにどう地域に入るかと教えるのが、どういゝう生き方をするか。生き方というのは、どう幸せと思ゝえる人生に導いてあげられるかなんです。

私たちはGDPを大きくするためにこの世界に生まれてきたわけではないわけで、私たちは1人1人が幸せになるために生まれてきました。お金を稼ぐために生まれてきたわけではなくて、幸せを得るためにお金が必要だったという手段でしかなかったはずのものが、いつの間にか目的になっている。それがそうではなくて、別の本当の目的があるんだということに気づいていくことが、実は過疎集落に若者が住みつく一番の早道だということが何となく最近わかってきました。

そう考えると、まさにこのキャリア教育ということ、何もキャリア教育全てがいいというわけではないですが、キャリア教育という手段を使いながら、自分たちそれぞれが年をとるまで、自分の幸せをずうっと探求していけるような社会、そんな社会をやっぱり自分たちの住んでいるこの町にもつくっていききたいなというふうに、私自身は聞いていながらとても感動させていただきました。ありがとうございました。

○保坂区長 濫澤委員のお話をお聞きしていますと、確かにデジタル技術の進化、あるいは人工知能、AI、こういった世界で生まれていく豊かさらしきもの。でも、一方においては、今、マタギの世界、大工の棟梁のお話が出ましたけれども、生きる実感を手ざわりで持って、そしてたくましく、また楽しみながら、人との関係を調和的、またお互いが補い合いながらつくっていく世界、これも大変すばらしい私たちの原点だなと思います。

松平委員に次にお聞きしていきたいんですが、学校現場での御経験が長いと思いますので、今の教育長のお話はいかがだったでしょうか。

○松平委員 今、渡部教育長から、尾山台小の子どもたちが自分のよさに気づく力が身について自己肯定感が非常に高まった、という発表がありました。とてもすばらしいことだと思います。

私の専門は体育ですけれども、大観衆を前にしたとき、萎縮する選手と逆に実力以上の力を発揮する選手がいます。その違いはどこから来るのかというと、一説には、これまで自分が否定されて育ったのか、肯定されて育ったのかの違いによるものだといわれています。ですから、私は学校現場においても自己肯定感を高めることは非常に大切であるし、その際のポイントを2つお話ししたいと思います。

1点目は、日本の児童・生徒の場合には、他者からの評価が大きく影響するということです。子どもは周りからの評価を非常に気にします。ですから、最終的には自己評価であるとしても、周りからの評価やまなざしを強く感じた上でなされているというのがポイントだと思います。単に「クラスで一番足が速い」という自信ではなく、「クラスで一番足が

速いので、クラスの代表に選ばれた。みんなの期待に応えられるように頑張りたい」という形の自信です。その意味では、「クラスで一番」かどうかは、さほど重要ではなくなっている、とさえ言えます。

2つ目のポイントは、「褒めて育てる」（褒めて自信を持たせて育てる）という発想より、「認められて育つ」（認められて自信を持って育つ）という発想の方が、子どもの自信が持続しやすい、ということです。よく「褒めて育てよ」と言いますが、大人が子どもを褒めるときは、一般に大人側の基準で一定の水準に到達した、水準を超えたときに褒めるわけです。そして、大人の側の基準で一定の水準に達しない場合には、「頑張りなさい」と叱咤激励することはあっても、褒めることは稀だと思います。

ところが、子どもが「認めてもらいたい」時というのは、一般に子どもの基準や水準で「褒められたい」のではないのでしょうか。子どもなりのこだわりで、努力したり工夫したりしたことを「認められたい」のです。だから、大人の考えた基準に達していなくても「褒めてほしい」と考えたり、大人の考えた水準に達して「褒められた」場合でさえ、大人の基準とは異なる子どもの基準でも「褒めてほしい」と考えたりするわけです。

だから、自分がさほど努力もしていない、自分の功績ではないことを、「皆さん、よく頑張りましたね」と全員を一くくりにして褒められても、さほどうれしくもなく、励みにもならないのかもしれませんが。ですから、教員が子どもの実際の行動と向き合うことなく、表面的にお世辞を言ったり、ちやほやしたりしても、子どもの自己肯定感を高めることはできないということです。ですから、単に「よかった、悪かった」と評価するだけの「褒める」では真の自己肯定感を育むことにはなりにくいと思います。

○保坂区長 それでは次に、PTAの活動も長くされてきた宮田委員に親として、今の尾山台小学校の教育長の話をどんなふうにお聞きになりましたか。

○宮田委員 保護者といたしましても、これからの社会を生き抜くといえますか、そのために子どもたちに身につけてほしい力というものがたくさんあります。尾山台小のお子さんたちはさまざまな活動を通して、例えば学校、家庭、地域とも連携した活動の中でいろいろなことに自分から気づき、そしてそれを次のステップにつなげていることがよくわかりました。

先ほどの天笠先生もおっしゃっていましたが、やはり社会の激しい変化の中で、それぞれが直面するさまざまな課題に対して柔軟にたくましく対応できて自立していくことが非常に大切で、自分の子どもを見ていなくても、もう既に一番下は大学生になってい

るんですけれども、受験だったり、就職だったり、そうしたときに自分でやってみようとか、挑戦してみようとか、そういった、先ほども松平先生から出ましたけれども、自己肯定感ということは社会を生きる中で必要だと実感しています。

先ほどのさまざまな活動を拝見しても、家庭でも子どもにさまざまな体験や経験をさせていくことは大切でございます。何か特別なことではなく、日常生活の中でそういった力、自己肯定感は養われていくのだと思いました。

○保坂区長 確かに親として、学校で勉強したことを今こうやって生かしているよというような明確なつながりを子どもに伝えたりとか、あるいは子どもが放課後や休日を過ごす、その過ごし方の中で、今、教育長がおっしゃったようなキャリア教育的な、キャリア教育と呼ばなくてもいいんですけれども、そういう体験、発見は必要だなというふうに思います。

次に、亀田委員に伺いたいんですが、文部科学省にもいらっしゃったことがあって、国立教育政策研究所の総括研究官という立場でもいらっしゃったと。今は障害を持っているお子さんの学習支援ということに取り組まれています、今、渡部教育長のお話をどんなふうに聞かれましたでしょうか。

○亀田委員 ありがとうございます。今、教育長の御発表を伺っていて、私がすごくいいなと思ったのは、キャリアン・パスポートの表紙のところに「なりたい自分」と書いてあって、「こうなりたい!」、「こんな人をめざしたい!」ということをイメージするとパワーが湧くということが書かれてあったのが、とてもいい言葉だなと思っておりました。

キャリア教育というのは理念であって、光の当て方であって、何か特別なことをすればキャリア教育ではなくて、全ての教育活動を通してキャリア教育を行っていくということが教育長のお話を伺ってよく分かりました。

区長から御紹介いただきましたように、私は文科省におりまして、キャリア教育の意義を文科省が平成16年に出したときも、ちょうどその担当の児童生徒課というところにおりまして、私自身は生徒指導のほうのチームだったんですけれども、そうしたキャリア教育の考え方が尾山台小のすばらしい実践として結実しているということ、きょうお話を伺って学ばせていただきました。

私は、2年前に転職をして、今は障害のあるお子さんを支援する会社におります。

この総合教育会議の中でも、これまで多様性ということもテーマになっていたようです。自己肯定感を育むためには、私は人それぞれの多様性を認めるということがとても大

事だと思います。

先ほどの児童生徒課というところで、当時、私は人権教育を担当していました。そのときに、自分の大切さとともに、他の人の大切さを認めることが人権尊重の理念だということが示されています。多様性を認めることで、自分も認めて他人も認めることができるようになっていくと考えます。

先ほど、松平委員からも他者から肯定されることが大事ということがありましたけれども、そうした自分の大切さ、ほかの人の大切さを認めるという人権教育がまず当たり前であって、そしてキャリア教育があり、さらにその土台の上に各学校の特色があるというそうした姿を、これから世田谷区としては目指していきたいと私は思っております。

○保坂区長 それでは、教育長に戻りまして、今、各教育委員の皆さんが感想を述べられたわけですが、尾山台小学校の取り組み、キャリア教育、また自己肯定感が大変短い期間の中で確かに上がった、こういったことがすごく成果としてあると思うんです。

一方では、世田谷区は学校が90校、たくさんのそれぞれの学校があって、地域のカラーという特徴も違います。という中で、尾山台小学校まで、恐らくそれ以前の教員としての体験の中からも、尾山台小学校でやられたことはきっと反映されていることと思いますが、現在、教育長として2カ月経過したわけですが、世田谷の学校全体にどんなふうに取り組んでいきたいか、その関連ですね、きょうの発表とこれからについてお話しいただけますでしょうか。

○渡部教育長 それぞれの分野の立場から、本当に尾山台小学校の取り組みに対して評価いただいたことを大変うれしく思っています。これは私だけがやったわけではなくて、本当に先生方が頑張ってくれたことです。先生方が頑張らなければ、もちろんこんなふうにも子どもは変化もしてこないんですが、子どもたちが生き生きと学ぶ様子は、教員にとっても物すごく喜びに感じました。最初は、平成26年の最初の評価のグラフを出したころには、校庭が閑散としていて、子どもたちが外遊びを余りしないような学校の状況がありました。もうすぐ終わっちゃうからとか、だるいからとか、暑いしとかって子どもたちが言って、なかなか外に行かないようなところもありました。だから、それを何とか変えようというところから考えたキャリア教育だったので、やっぱり子どもが生き生きと学んで変化してきたということは、先生方にとってはとても大きな喜びでした。6年生の子が1年生を喜ばせるために、では、次は何の遊びを考えようかなと生き生きとしたり、それから、ボランティア活動を自由にやらせていたんですが、余り活躍をする場のない子たちが1年生の

教室にずっと行っているとか、そういう姿は先生方にとってもすごく喜びでした。そして、先生方がチームとして団結をしていって、学校全体が同じ方向を向いているなというふうに思えたことも、私にとっては大きな喜びでした。若い先生方もアイデアが生かされるので、こんなことをやったらどうみたいなことをどんどん言うてくるのを、みんなで話し合いをして、では、こうやりましょうみたいに話ができるのもすごくよかったことです。若い先生とベテランの先生がいる中でも話し合える雰囲気できたことも大きな喜びでした。

私は、世田谷区の教育長になりましたので、これから世田谷の教育について考えていかなければいけないというふうに考えています。そのときに、キャリア教育のこの考え方というのは、どの学校もがキャリア教育に取り組むわけではなく、理念として持っていてただければいいと思うんですね。

私は実はキャリア教育というのは余りずっとやってきたわけではなく、平成26年に研修を受けたんです。文科省国立教育政策研究所、先ほどの亀田先生がいたところのキャリア教育の研修を26年に受けて、それから27年、28年と校内研究で取り組んだんです。だから、ずっとキャリア教育をやっているわけでもなくて、この理念さえみんなが共通理解すればできる教育なんです。だから、このキャリア教育を下敷きにして、それぞれの学校が先生たち、子どもたち、それから地域の実態に合わせてアレンジをしていただいて、そして、私はキャリア教育というふうな道で山を登りましたが、松平先生は体育でいきましたが、そういうふうな形で、子どもたちが将来に向けて努力できるような教育を推進していける方法をこれからとっていききたいなというふうに考えています。だから、それぞれの学校、それぞれの子ども、それぞれの実態、地域に合わせればいいというふうに考えています。

○保坂区長 では、その後半ですね。時間があと限られてしまっているんですが、これからの世田谷区の教育をどのようによりよく変えていくことができるのかという点について、今度、順番を変えて、松平委員から、先ほど大観衆を前に萎縮して本来の力が発揮できないタイプと、逆の、ふだんよりずっと発揮するよというタイプの話、すごくわかりやすかったんですが、前半、教育推進会議で天笠先生がお話しになったことなども踏まえて、たくさんのお話しになられましたけれども、これからの時代、この世田谷の教育をこういうポイントで変えていけたらというあたりについてお話しいただけますでしょうか。

○松平委員 尾山台でも縦のつながりということで異学年交流ということを挙げていまし

た。現行の小中学校の学習指導要領にも異年齢集団による交流の重要性を挙げています。この異年齢集団の交流が今後の世田谷の教育のポイントだと思います。

私は年少者、小さい子の課題は何かと一言で表現するなら「人とかかわることが好き」、「集団活動に進んで参加できる」ことだと思います。そして、年長者になるにつれ、そうしたかかわりを通して「進んで協力できた」「自分から働きかけができた」「誰かの役に立つことができた」という、集団の一員としての自信や誇りの獲得が課題になります。

そういう意味では、さまざまな子どもたちと一緒に遊んだりすることを通して「人とかかわることって楽しい」「人とかかわることって苦痛なことではない」と感じるころから「人とのかかわり」が始まり、それが社会性の基礎を形づくり、社会性を培うことにもつながるのだと考えています。

○保坂区長 それでは、亀田委員にお聞きしたいんですが、オランダにイエナプラン教育というのがあって、私も前教育長、また校長先生らと七、八人で見に行ってきましたけれども、学年は異年齢、島があって、たしか時間割も1人1人が違う時間割で、自分のプログラムに合わせてその教材もセレクトしながら学んでいました。とてもこれは日本では無理なのかなという意見もあるし、いやいや、それを始めてみようという公立学校も出てきたりしています。

天笠先生のお話でも、たくさんのお話になりましたけれども、一斉授業、みんな一緒にということのよさもあるんだけれども、やっぱり特別支援教育などでは個人個人に即して丁寧なプッシュが必要な場面もあると思います。でも、それは特別支援教育に限られた課題ではなくて、実は明治以来の黒板があって、先生がいて一斉にというスタイルが、これからやっぱりだんだん変わっていかなければいけないんじゃないかという議論があちこちで出てきていると思います。そのあたり、ぜひお考えを聞かせていただければと思います。

○亀田委員 ありがとうございます。ある小学校のエピソードをちょっとお話しさせていただければと思うんですが、小学校を訪問したときに、ちょっと正確な記憶ではないので、間違っていたら御容赦いただきたいんですが、印象に残ったことがありまして、1年生か2年生の低学年の国語の授業でした。カエルが主人公のお話か詩がありました。こういうお話です。

空に雲が出てきて、カエルがゲコッと鳴いたと。雨がぽつんと降ってきて、カエルがゲコゲコゲコッと鳴いた。雨がざあっと降ってきて、カエルがゲコゲコゲコゲコゲコゲ

コゲコゲと鳴いた。

このときのカエルの気持ち、みんなどう思いますかって、先生がお尋ねになりました。区長だったらどうお答えになりますでしょうか。

○保坂区長 雨が降ってきて気持ちがいいな。

○亀田委員 ありがとうございます。お子さんたちも、はいと手を挙げて、わあいとか、カエルはやったー！と思ったって答えていました。先生も、そうだよ、カエルはうれしかったんだよねと言って授業は終わりました。その先生の授業はとてもすばらしくて、子どもたちはとても楽しそうにしていたので、それはとてもよかったと思っています。

けれども、私の前にいた一番後ろの席のお子さんのノートには、大雨が降ってきて危ない、大変だって言っていると書いてあったんです。とても良い発想だなと私は思いました。ただ、授業はそれで終わってしまったので、お子さんはそのノートを閉じて、休み時間になりました。私はこのお子さんは、そのときどう思ったんだろうなと。

さらに言えば、多数意見でないというところに価値がある、社会ではオンリーワンが価値があったり、そういうところからイノベーションが生まれてくる。

その授業がどうということではなくて、そういう場面をたまたま見て、私自身が考えさせられたわけです。そういうことを大事にするような世田谷区になっていきたいとか、なっていただきたいなという思いでございます。

○保坂区長 それは具体的にどういうふうに、もう少しどの辺に取り組めば。カエルが大変だ、危ないという子のちょっとしたメモというか、多数派は僕のような意見だったと思うんですが。

○亀田委員 そのためには、まず考え方として、多様性を大事にして、むしろ少数の意見を大事にするという考え方もあるでしょうし、実際の授業の場面ではいろいろな学び方を示して一人一人に合った学び方で学ぶということもあるでしょう。

さらには、ICTの活用ということは非常に重要だと思っていて、ICTを活用することによって、個に応じた学びが可能になり、また、さまざまな意見を子どもたちで共有できるということもあると思います。そこは今後皆様と学校の先生方からもお話を伺いながら、教育委員会として考えていきたいと思っています。

○保坂区長 それでは、宮田委員のほうに、今度は保護者として、あるいは世田谷区民としてでもいいんですが、常に教育なり子育て、喜びとともに不安があって、その不安のほうが多いという人も、場合によってはそんなに少数派ではないですね。受験のことだ

とか、あるいは今だと受験だけ準備していてもAIの発達もあるし、いろいろな課題が目の前に情報があらわれきて、なかなか落ちつかない時代ですよ。そんなときに、学校教育、学校の間、地域、どんな形でこれから変わっていけばいいのか、あるいは進化しているのか、そのあたりを期待も込めてお話しいただけますでしょうか。

○宮田委員 子どもは1人1人個性が違う、これは言うまでもないんですけども、その1人1人の持っているよさを周囲の大人が認める、そしてありのままの子どもを受けとめて、1人の人間として向き合うということが基盤にあると思います。

学校のほうでは、先生方がいろんな取り組みをしてくださっております。その中でやはり大事なのは、学校、地域、家庭が連携して、子どもを真ん中にして向き合うこと。先ほどの天竺先生もおっしゃっていましたが、どういうふうに学校が教育目標を立てているのか、それを保護者のほうでも理解といいますか認識して、家庭で子どもへの声かけだったり、共有して育てていくということが必要だと思えます。

尾山台小の例がありましたけれども、学校と地域と家庭が連携すると何でもできるんだなど、子どもの将来を見つめ、子どもがあれだけ変われるんだと思えました。周りの大人が変われば子どもは変わるということだと思えますので、みんなでいろんな意見を出し合って、よりよい世田谷区の教育にしていきたいと思っております。子どもの持つ可能性を活かせるよう、体験・経験の機会を区でもさらに充実していただきたいと願います。

○保坂区長 子どもたちと地域ということでは、世田谷区はどこの地域でもお祭りやフリーマーケットや、あるいは子どもたちが主人公になったブースなど、さまざまな形で参加があり、協働があると思います。ただ、そこをさらに町の中に生きた学びがあるよというところで、学校外でさまざまな学びのチャンネルを、しかもすぐ忘れるような知識ではなくて体に刻んでいくというのが大事かなと私も思いました。

澁澤委員に伺いたいんですが、限界集落のフィールドワーク、あるいは今お話しになったような20代、30代、あるいは40代の人たちとともに、そういった中山間地に入られていて、改めて学びの身体性というか、体に刻むということについて、今、世田谷区は91万5000人なんですね。こういった中で、子どもたちも大勢いる中で、今後の質の転換を図る可能性がどのあたりにあるのかということについてお願いいたします。

○澁澤委員 非常に大きい命題で、それに今短時間でお答えすることもできないし、私自身もアイデアが固まっていないんですが、1つ言えることは、やっぱり私たちがもう1回身体というものを見直さなきゃいけない。身体性と言いましたけれども、私たちは今、例

えば職業を選ぶ、それこそキャリア教育という生き方を選ぶでも、全部頭の中で物を考えて、それをどう実現するかということが人生だと思っているんですが、先ほど言った地域ですとか、あるいはつい50年前までの日本では、自分の肉体をどう生かすかということが人生の一番の大きな目的だった。そのために食糧をつくらなきゃいけないし、火をおこさなきゃいけないという時代が延々と続いてきたわけです。

まさにソサエティ5.0じゃないですけども、その肉体の部分がどんどんこれからAIですとかIoTに置きかわっていきます。私たちも実際、私は今、昔、手の骨を折ったところにはチタンの棒が入っていたりとか、今既に私たちの体自体も、心臓の人工弁や、あるいは血管ですとか、どんどんどんどん人工物に置きかわって行って、私たちは頭だけで人生を考えているんですが、果たしてそれが幸せなのかということを考えなきゃいけないことだと思います。

ソサエティ5.0の中で2030年とか2040年という数字が出てきました。それはSDGsにとっても大変大きな数字です。なぜかという、SDGsの一番最初のところに、2030年までに人類は不平等や飢餓をなくす、それを経験する最初の人類になるかもしれないし、2030年までに地球を救うチャンスを持つ最後の人類になるかもしれないということが書かれています。2030年まで私たちがどう生きるか。今までは経済偏重の時代というのを、環境と経済と社会、その調和により変革するというふうに書かれています。そして誰も取り残さない、どんな子どもも取り残さない社会をどうつくれるか。

皆さん、グreta・トゥーンベリという女性の名前を御存じでしょうか。ことしのノーベル平和賞候補です。彼女は発達障害を持った子どもなんですが、彼女は16歳のときに学校を休んで、スウェーデンの会議場の前でストライキを始めました。今、それが世界的に広がっています。つまり、私たちがやってきた環境問題に対する取り組み、CO₂の削減だとか、あるいは新しい技術をつくってプリウスが走り、そしてLED電球がとまり、エコバッグを持つといったようなこと。だけれども、この50年、環境は全くよくなっていない。つまり、彼女たちは、もう今の大人たちに任せたら2030年、2040年までを迎えられないんじゃないかという危機意識を持っている子たちがたくさん出てきました。イギリスでも、ドイツでも、アメリカでも何万人という規模の中学生や高校生のデモが行われています。そして、それにイギリスの文部科学大臣が、私たちは彼らを誇りに思うというコメントを出しました。

世界はそのぐらいせっぱ詰まっています。日本にいるとなかなかわかりません。ですか

ら、A IやI o Tの技術ができたのならば、世界の子どもたちと同じ年代の子どもたちと世田谷の子どもがぜひディスカッションができ、また、世田谷は恵まれていますので、海外交流などの制度がありますので、そんなことを生かして一緒に地球の未来、2030年を考えられるような教育ができればいいのかなというふうに思っています。

○保坂区長 ありがとうございます。長い我々人類の歴史の中では常に進化が続いていたわけではなくて、失敗も、あるいはほころびもあったわけで、ある意味でデジタル技術革命は大変すばらしい環境をもたらしたわけなんですけれども、一方において思考の単純化、あるいは憎悪の共有だとか、あるいはフェイクというものが瞬く間に広がるということが、世界の政治、あるいはいろいろな世論を急変させているという問題にも我々は直面しています。とはいえ、A IやI C Tということと無縁に、これからの教育を語れるわけもない。しかしながら、A IやI C Tが出てきたからといって自動的にバージョンアップして進化できるというのも、これはちょっと冷静に考えなければいけないというあたりを、ぜひこの総合教育会議で次回のテーマとして、I C Tの技術的な進化、可能性と、しかし、我々人間がここは押さえておかなければいけない、教育の場でここはしっかり、むしろ構築しなければいけないという人間のわざというところも考えていきたいと思えます。

2年後に新教育センター、教育総合センターが建ち上がります。ここが今、澁澤委員がおっしゃいましたけれども、世界中の若者がこの気象激変、異変を見て、もうこのままでは間に合わない、こういう意識を持って声を上げている、事実だと思います。本当に間に合うかどうかわからないという意味では、学校の中で先生が全知全能の神としていろんな知識で、世の中はこうなっているんだということを教えていた時代というよりは、子どもたちと一緒に危機感を共有して、さあ、どうしようというような共同の学び、そしてライフスタイルをつくり上げていくことが、これからの世田谷の教育の課題かなということ強く感じました。この総合教育会議、ぜひまた次回掘り下げていきたいと思えます。

時間になりましたので、これで終わりたいと思えます。最後まで参加された皆さん、教育委員の皆さん、ありがとうございます。(拍手)

○司会 保坂区長、教育委員会の皆様、ありがとうございます。

最後に、事務局よりいま一度アンケートの御協力についてお願い申し上げます。配付資料の中にアンケート用紙がございますので、お帰りの際、アンケートに御協力くださいますようお願いいたします。用紙は出口で回収いたします。

以上をもちまして世田谷区総合教育会議及び世田谷区教育推進会議のシンポジウムを終

いたします。本日は、御来場いただき、ありがとうございました。(拍手)

午後 4 時33分閉会